

GIGAスクールはじめて日記 5



教師の学びも 個別最適・ 協働的に!

堀田龍也 [監修]

佐藤和紀・三井一希・八木澤史子 [編著]



教師の学びも個別最適・協働的に変えて行こう



東京学芸大学教職大学院・教授 ● 堀田龍也

◆1 本書の企画意図

前書では「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の実現に具体的に迫っていくために、児童生徒1人1台の情報端末をどのように活用していけばよいかについて、画面入りで具体的に紹介しました。クラウドを用いて児童生徒の学びの状態を可視化することによって、他者参照を行いやすくし、協働する相手を適切に選べるようにし、教師が必要な介入をすることによって、子どもたちに自律的に学ぶ力をつけていく具体的な方法を数多く示しました。

自律的に学ぶ子どもたちを育てる教師に必要なことは何でしょうか。クラウドを用いて子どもたちの学びの状態を可視化するような情報技術に対する理解やスキルは当然必要です。また、そのような学習環境が活かされるような単元設計、パフォーマンス課題の設定、子どもたちの様子を把握する見取りの力、子どもたちの性格や努力の度合いに合わせた適切な介入などの教育技術が教師に求められます。これによって子どもたちの学びの精度が決まります。

しかし私たちは、それだけではないと確信しています。自律的に学ぶ子どもたちをうまく育てている教師たちは、決まって教師たち自身も学び続けています。教師自身が、学び手としての自分を対象化し、学びのどこが楽しいか、あ

るいは苦しいか、そんな時にどのように対応すればよいか、どんな時に学習リソースを見直し、どんな風に他者を頼ればいいのかを、教師自身が経験していることが、学習指導に活かされているのです。子どもたちは、そんな教師の姿を見て「あんな風になりたい」と憧れるのです。日々学ばない教師のもとで有能な学び手が育つはずもないのです。

この書籍は、「教師の学び」にフォーカスしました。自律的に学ぶ子どもたちのように、教師もまた自律的に学ぼうということです。考えてみれば、日々の授業がうまくいったかどうかを振り返ることも学びの機会です。学年会などで同僚の先生と話をしてなるほどと思うことがあるとすれば、それもまた学びです。教材研究についても、明日の授業のために消費的に行うのではなく、この教材の意義、それが伝わるような学習活動の支援、発問の工夫などを考えるようにすれば、自分の力量向上につながります。これも学びです。忙しい中で出かけて行くような教育センターの研修も、日々の教師生活を少し離れた位置から考え直すという学びです。

そしてこの書籍も「GIGA スクールはじめて日記」のシリーズに位置付けられています。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指すというスローガンは、教師にもあては

まります。教師生活は日々忙しく、成長を実感する余裕さえありません。そんな私たちが、自分の周囲で起こる日々の出来事を学びとして捉え、お互いの学びを可視化し、情報を共有し、相互に啓発することを、クラウドを通して行っていく。GIGA 時代になってこのような学びが「はじめて」自覚され、そのことをいろんな教師が「日記」のように記録した、それが本書です。

◆2 教師の学びの射程とは

教師の学びは大人の学びですから、子どもの学びと異なる様相があります。

まず、基本は OJT (On the Job Training) であることです。日々の仕事の中で学びます。同じ教師であっても、勤務校や学年、担当する教科等が異なったり、担任する子どもたちが異なったりするので、学びは教師個々に成立することになります。つまり教師の学びは個別적입니다。学びが個別であるが故に、自分が仕事から学んだことを言語化し、それを誰かに伝える関係を持つことは、学びを協働的にすることにつながります。対話的と言ってもいいでしょう。他者の目線は自分の気づきの限界を教えてください。なるほどと思うことを明日からやってみようと思うのは、他者から得た学びを自分の仕事に還元するということであり、自分の仕事をさらによくしようという最適化への努力になります。

校内研究で他の先生の授業の工夫を知ったり、講演会で新しい見方を知ったりすることがあります。同じ授業や講演から感じることは、教師によって少しずつ異なるでしょう。教師としての力量や、重きを置く部分が異なっているのだから当然です。それぞれの気づきをチャットスペースで共有し合うことで、新たな気づきを得ることができます。

最近の教員研修には、Google Classroom 等で事前に必要なリソースが配信され、何をすればよいかの見通しを持って研修に参加できるよ

うな工夫が一般的です。この場合、研修を施す側が、研修を受講する教師 1 人ひとりに学びを促そうと工夫しているわけです。したがってこのような研修のデザインは、授業デザインと相似形ということになります。

それぞれの教師には個性があります。年次ごとの悉皆研修のようなもの以外、何を学びたいかは教師ごとに異なります。幸い今日では、休日や夜にもオンラインセミナーが開催されています。時間のやりくりを上手にすれば、授業を自習にして出かけなくても学ぶことはできます。同僚と一緒にオンラインセミナーに参加するようなこともできます。若い教師向けの授業講座のようなセミナーや、子育て中のお母さん教師のためのセミナーだってあります。学びリソースは豊富にある——となれば、重要なのは、教師それぞれの学ぶ意欲です。「学びに向かう力」は子どもたちだけでなく、教師にも求められているのです。

◆3 国策は教師の学びを後押ししている

中央教育審議会は、令和 6 年 8 月 27 日に『「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について』という答申を発出しました。

この答申は当時、大きな話題になりました。マスコミが答申の一部だけを取り上げ、答申そのものを読みもしない人たちが SNS 等で騒ぎ立てたからです。

この重要な答申のポイントを説明しておきましょう。もちろん、詳しい内容は答申を実際に読んでください。

この答申のポイントは、基本的な方向性として「第 3 章：学校における働き方改革のさらなる加速化」「第 4 章：学校の指導・運営体制の充実」「第 5 章：教師の処遇改善」という 3 つが掲げられていることです。このうち第 4 章には、教員定数の改善とか、小学校中学年についても教科担任制を推進するとか、中学校も 35

人学級にしていくとか、支援スタッフをさらに充実させるなどの制度的改善について示されています。どちらかという行政側の役割が整理されていると理解してよいでしょう。第5章には、教職調整額を10%に向けてアップさせていくことが示されています。マスコミでもっとも多く取り上げられたのはこの第5章でした。教師は高度な専門職であり、長く働いたら残業代を出すと、管理職の命令によって残業をする/しないというような業務形態は適さないということです。もちろんこれらの給与面の処遇は、第4章に掲げられた制度改革と共に進んでいく必要があります。

しかし、学校現場が行うべきもっとも重要なことは、第3章に書かれています。本書に関する記述を取り上げて見ていきましょう。

まず「教師の業務負担を軽減し、働き方改革を実現する上でも極めて大きな役割を果たすICTは、学校現場に必須のものである」という強い姿勢が示されています。また校務等に紙で処理するものが残っているとすれば、早急にデジタル化していくことが望まれます。教育委員会から来る書類は教育委員会としてデジタル対応にさせていただくとしても、各学校の中で使われている書類は、もはやデジタルで十分なものもあるはずです。業務改善はここから始めるといいでしょう。

答申では、特に力を入れる点として「1人1台端末の積極的な活用や、汎用のクラウドツールを活用した教職員間での情報交換の励行、会議資料や各種手続きに係る書類のペーパーレス化、民間企業向けクラウドツールの転用による校務処理の負担軽減を図るとともに、スケジュール管理のオンライン化や、学校と保護者等間の連絡手段を原則としてデジタル化するなどの取組を進める必要がある」と書かれています。またテレワークについても「柔軟な働き方を実現するための方策の一つである」とし、「例

えば、授業計画の作成、オンライン会議や研修など、テレワークによっても可能な業務」もあるとしています。

この答申の第3章に書かれている、学校における働き方改革のさらなる加速化のためのクラウドツール等の積極的な活用を、先んじて実践し、具体的なノウハウとして示すことが本書の役割です。答申の記述にある「汎用のクラウドツール」をどうやって活用するのか、「教職員間での情報交換」をどのように励行するのか、「ペーパーレス化」の事例、「校務処理の負担軽減」のさまざまな事例、「スケジュール管理のオンライン化」「学校と保護者等間の連絡手段のデジタル化」の事例、「授業計画の作成」「オンライン会議や研修」の事例などを集め、できるだけ具体的に掲載しています。

これらのことは、答申には働き方改革の工夫として書かれています。働き方改革の大目標は、教師が教師でないとできない仕事に集中するための業務負担の改善です。教師は専門職ですから、自身が学び、教師としての力量を高め、子どもたちの前に立ち、その教師の学ぶ姿勢から子どもたちを感化していくのです。業務負担の改善は、そのための職場環境の見直しなのです。

本書の事例を参考にして、ぜひ読者のみなさんの学校の業務改善、働き方改革と、各先生方の学びの促進と共有を進め、学びに溢れる教師集団がつくられることを願っています。

〈参考文献〉

- ・文部科学省(2024)「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について(答申)(中教審第251号)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00006.html

CONTENTS

GIGA スクールはじめて日記 5
教師の学びも個別最適・協働的に!

はじめに 教師の学びも個別最適・協働的に変えて行こう	2
----------------------------	---

理論編

① 令和の日本型学校教育を支える教師の学びとその伴走支援	9
② 情報端末とクラウドが導く教師の学び	15
③ 学習理論から考える教師の学び	21

事例編

第 1 章 力量向上のための個人の学びを DX する

01 リアルタイムなアウトプットと組み合わせた研修受講	28
02 教育実習生もクラウド環境での授業を体験する	30
03 Google Workspace for Education を活用した学びの蓄積	32
04 ミッション形式を取り入れた学びの環境の創出	34
05 教科書読解の演習体験	36
06 教員研修での生成 AI の体験と活用	38
07 オンラインセミナーへの参加と情報共有	40
COLUMN 教師の学びを DX する意義	42

第2章 学校を超えてつながる学びをDXする

- 01 オンラインを活用した教師の学びの場づくり 46
- 02 Google Chat™を活用した授業への即時フィードバック 48
- 03 Google Chatを活用した実践共有 50
- 04 ICT支援員と協働した情報共有環境の構築 52
- 05 クラウド上の学習指導案をベースにした意見交流 54
- 06 学習指導案のクラウド化による非同期での学び 56
- 07 若手教師を支える研究会 58

COLUMN 学校を超えてつながることで「研修転移」を実現する研修デザイン 60

第3章 校内研修をDXして同僚と学ぶ

- 01 Google Chatをフル活用した教師の学び 64
- 02 学習指導案や教材のクラウド共有 66
- 03 一斉教員研修から自由進度教員研修への転換 68
- 04 実践交流を目的とした対面での自主研修 70
- 05 研修動画を用いた効率的な教員研修 72
- 06 タイムラインビュー機能を使った教員研修の進捗管理 74
- 07 児童生徒アンケートによる授業研究の成果と課題の把握 76
- 08 共同編集機能を用いた学習指導案検討 78
- 09 クラウドベースで取り組む授業研究 80

10	Google スプレッドシート™ を活用した振り返りの共有	82
11	個別最適な学びと協働的な学びの学習指導案の検討	84
COLUMN	校内研修を DX するよさと変化を具体的にイメージする	86

第4章 教育センターなどの研修を DX して学びを支援する

01	研究授業の情報をクラウドで一覧化	90
02	学習者の画面を参観者と共有する一工夫	92
03	授業動画による子ども主体の授業イメージの共有	94
04	セルフチェックイン方式による公開授業の受付簡素化	96
05	児童生徒と同じ流れの教員研修	98
06	研修参加者のコメントや質問を Google フォームで即時に吸い上げ	100
COLUMN	集合研修の DX	102

第5章 DX で学ぶ教師を支える管理職と教育委員会

01	DX で学ぶ教師を支える管理職 (校長) の役割	106
02	DX で学ぶ教師を支える管理職 (教頭) の役割	108
03	DX で学ぶ教師を支える教務主任の役割 1	110
04	DX で学ぶ教師を支える教務主任の役割 2	112
05	DX で学ぶ教師を支える研究主任の役割 1	114
06	DX で学ぶ教師を支える研究主任の役割 2	116

07	DXで学ぶ教師を支える指導主事の役割1	118
08	DXで学ぶ教師を支える指導主事の役割2	120
COLUMN	校内研修をDXするよさと変化を具体的にイメージする	122

本書で紹介される活動実践は、Google Workspace for Education を中心としたツール（Chromebook™、Gmail™、Google Classroom、Google Chat、Google Meet™、Google カレンダー™、Google サイト™、Google スプレッドシート、Google スライド™、Google ドキュメント™、Google フォーム、Google ドライブ™、Gemini™ および YouTube™）を駆使して行われています。

1

力量向上のための 個人の学びを DX する

- ◎リアルタイムなアウトプットと組み合わせた研修受講
- ◎教育実習生もクラウド環境での授業を体験する
- ◎Google Workspace for Education を活用した学びの蓄積
- ◎ミッション形式を取り入れた学びの環境の創出
- ◎教科書読解の演習体験
- ◎教員研修での生成 AI の体験と活用
- ◎オンラインセミナーへの参加と情報共有

01 リアルタイムなアウトプットと 組み合わせた研修受講



栃木県壬生町立壬生東小学校・教諭(元壬生町教育委員会・指導主事) ● 稲木健太郎

個人単位

学校単位

自治体単位

マネジメント

学習観の転換

授業力向上

校務 DX

情報共有・交流

使用ツール



インプット↔アウトプットの往還

インプットと同時に気づきや感想をリアルタイムで書き込める「場」を生むクラウド活用。インプットとアウトプットの往還で感じる、知識をつくる感覚、見方・考え方の広がり、研修の熱量。



■ インプットとアウトプットを往還する

インプットがメインの講話型の研修でも、クラウドの活用により、対話型のようなアウトプットを同時に行えるようになった。

校内研修でも教育委員会主催の研修でも、話を聞いてインプットする研修場面がある。その際、個人の学びをアウトプットする機会は最後の振り返りや感想が主だった。それが、Google Chatのようにリアルタイムでアウトプットする「場」が設定されていることで、話を聞くと同時に気づきや感想を書き込めるようになった。例えば、「重要そうなキーワードだ」「この事例が気になる」と思えば、すぐにそれをコメントとしてチャットに書き込みアウトプットする。まるで講師や同僚の教師と対話しているような感覚になる（図1）。

知識を得るときの考え方として、知識は人から与えられるものではなく、自ら構成していくものとする立場がある。インプットとアウトプットを同時に行い、何度も往還する学びは、知識を自ら構成するという感覚を、教師自身が実感を持って理解できる機会となっている。

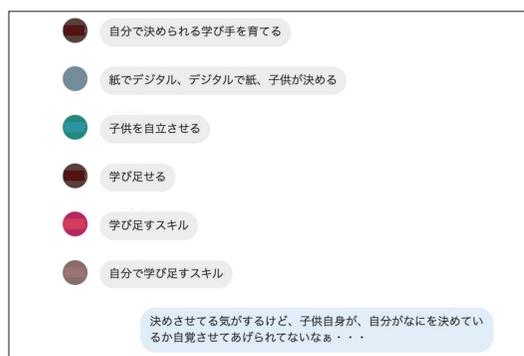


図1 リアルタイムでアウトプットできる場

■ 広がる見方・考え方、感じる熱量

研修中にアウトプットした学びがリアルタイムで共有されると、教師それぞれの見方や考え方、熱量に触れる機会につながる。

これまでの研修では、手元のメモや、自分だ

けが見られるファイルで記録を取ることが多かった。それが、Chat等を用いて学びを他者と共有するようになると、見方・考え方の広がりや学びの熱量を感じるようになる。

例えば、講話を聞いて自分が「これは授業で生かせそうだな」と思った事例も、他の人は「校務の効率化につながりそうだな」と考える場合がある。子どもの姿に目を向ける人もいれば、教師の指導法に着目する人がいることにも気づく。研修後に書き込まれた感想では、「チャットを通じて、互いがどんなことを思って話を聞いているのか、共有しながらお話をうかがえたので、考えがとても深まりました。」のように、参加者の見方・考え方の広がりの実感もその場で共有されていた。なにより、さまざま投稿されるコメントから、それぞれの先生の学びの「熱量」を感じるようになった。

また、アウトプットした学びが「残る」よさもある。書き込まれた考えや疑問がクラウド上に残ることで、あの件について〇〇先生に聞いてみよう、という研修後のアクションにもつながる。当日の研修に参加できない状況のときも、研修の動画や資料とともにクラウド上に書き込まれたコメントを読むことで、他の教師と対話する感覚やその場の熱量を感じることができる。

学びのアウトプットとその共有は、時間と場所を超えて教員の見方・考え方、学びの熱量を広げる場になっているように思う（図2）。



図2 Chatに書き込みながら、他者の見方・考え方と熱量にふれる

08 DXで学ぶ教師を支える 指導主事の役割 2



静岡県吉田町教育委員会・指導主事 ● 平井 奉子

個人単位

学校単位

自治体単位

マネジメント

学習観の転換

授業力向上

校務 DX

情報共有・交流

使用ツール



リアルとデジタルが往還する 伴走支援

指導主事も含め、全ての教師が学び手という意識のもと、Google Chatなどを活用し、教師が学び続ける環境を構築し、研修の日常化を目指している。リアルとデジタルを往還し質の高い関係性を築きながら、教師の成長を支援する伴走者を目指す。

★R6全教職員@吉田町 外部

242人のメンバー・限定公開

チャット

共有中

タスク

↑とても素敵ですね！

今日、明日と平井ふらっと参観させていただきます！！（楽しみで仕方ない）
こういうところをリアルにお届けできたら！と思います。
よろしくお祈いします ✨

5月1日, 8:37

まずは、吉田中学校です！

返信 20 件 5月1日, 10:45

5月1日, 10:46

自彊小へ来ました！

2

返信 25 件 5月1日, 12:12

■ 前提として

指導主事であっても管理職であっても、研修主任であっても学級担任であっても、学び手という点では皆同じだと思っている。そのため、対等な立場で交流ができ、立場を超えて切磋琢磨しながら、前向きに学び続けていきたいと考えている。

■ 日常化を目指す

今までは1つひとつの研修会がばらばらで、イベントの要素が大きかったと思う。それら1つひとつを別々に考えるのではなく、全てをつなげて考えることで、全体を捉え、目的に返りながら、本当に必要なもの、よりよくするために改善すべきもの等が見えてくると考える。

全てをつなげ俯瞰して考える中で、「いつもいつでも誰とでも」が保証される環境を構築できたらい。それが日常化につながる。

その1つにChatを活用した吉田町全教職員Chatスペースは大きな役割を果たしている。

Chatの活用も、はじめは課題が出てくる。しかし、課題を解決しながらやり続けることで、それが当たり前になるときがある。

■ 一方通行にならないためのリアル支援

吉田町全教職員Chatスペースでは、参観した授業の様子を指導主事も積極的に発信している。チャットでの情報共有は、町内の教員をつなぐという大きな目的をもつ。自分のことを発信することはなかなかできない教師が多いため、指導主事として積極的に発信することは重要である。また、いつでも相談に乗ったり議論したりすることもチャットのよさである(図1)。

それと同時に、学校へ足を運びリアルで対話するつながりもとても大切である(図2)。

自治体の規模や指導主事の業務量によってできることの範囲には幅があると思うが、現場に足を運び、現場の声を聞き続けていくことは指

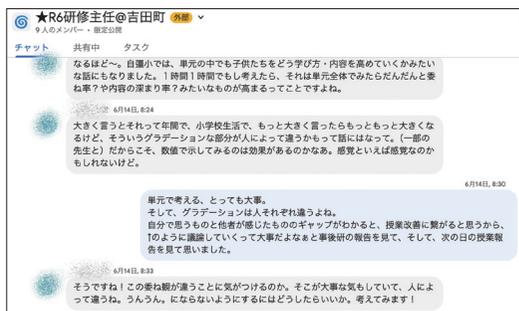


図1 研修主任と指導主事のやりとり



図2 推進初期は毎日のように参観したことを、Googleスライドにまとめて発信

導主事の使命ではないかと思う。

また、最新の情報を発信することも大切な役割である(図3)。「必要な情報は自分で取りに行く」という感覚を身につけてもらうためには、例えば、Chat上に作成した吉田町全教職員Chatスペースのように全員が同じように見えている状態が大事であり、そこで情報を発信することに意味がある。

リアルとデジタルを往還しながら、教職員との関わりの量を増やし、それを質的に向上させていくことが指導主事として重要だと考えている。



図3 国の動きも積極的に発信

◎監修者

堀田龍也 (ほりた たつや)

東京学芸大学教職大学院・教授、同学長特別補佐

文部科学省・視学委員。国立教育政策研究所・上席フェロー。信州大学・特任教授。

1964年熊本県天草生まれ。東京学芸大学教育学部卒業。博士（工学）（東京工業大学）。東京都公立小学校・教諭、富山大学教育学部や静岡大学情報学部・助教授、メディア教育開発センター・准教授、玉川大学教職大学院・教授。文部科学省・参与、東北大学大学院情報科学研究科・教授等を経て、2024年より現職。中央教育審議会・委員、同デジタル学習基盤特別委員会・委員長等を歴任。2021年より日本教育工学会・会長。

著書に『学校アップデート』（さくら社）、『情報社会を支える教師になるための教育の方法と技術』（三省堂）、『クラウドで育てる次世代型情報活用能力』（小学館）など

◎編著者

佐藤和紀 (さとう かずのり)

信州大学教育学部・准教授

1980年長野県軽井沢生まれ。東北大学大学院情報科学研究科修了、博士（情報科学）。東京都公立小学校・主任教諭、常葉大学教育学部・専任講師等を経て、2020年より現職。文部科学省 教育の情報化に関する手引 執筆協力者、同「GIGA スクール構想に基づく1人1台端末の円滑な利活用に関する調査協力者会議」委員、同ICT活用教育アドバイザー等を歴任。2021年より日本教育工学会・代議員、2023年よりNITS 独立行政法人教職員支援機構・フェロー。

著書に『情報社会を支える教師になるための教育の方法と技術』（三省堂）、『1人1台端末活用パーフェクトQ&A』（明治図書）、『ICT活用の理論と実践：DX時代の教師をめざして』（北大路書房）など

三井一希 (みついかずき)

山梨大学教育学部・准教授

1982年山梨県北杜市生まれ。熊本大学大学院教授システム学専攻修了、博士（学術）。山梨県公立小学校・教諭、台北日本人学校（台湾）・教諭、常葉大学教育学部・専任講師を経て、2022年より現職。文部科学省「GIGAスクール構想に基づく1人1台端末の円滑な利活用に関する調査協力者会議」委員、同学校DX戦略アドバイザー、デジタル庁 デジタル推進委員、日本教育工学協会理事、東京教育研究所主任研究員などを歴任。令和6年度発行 小学校教科書（算数、理科、生活）編集協力者、令和7年度発行 中学校教科書（数学、技術・家庭）編集協力者。文部科学省「情報活用能力調査」作問委員。著書に『1人1台端末活用パーフェクトQ & A』（明治図書）、『小学校低学年1人1台端末を活用した授業実践ガイド』（東京書籍）など

八木澤史子 (やぎさわ ふみこ)

千葉大学教育学部・助教

1978年広島県広島市生まれ。東北大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了、博士（情報科学）。広島市・広島県・東京都の公立小学校教員を経て、2022年4年より現職。（公財）教科書研究センター「授業における教科書の使い方に関する調査研究」委員、同センター特別研究員、日本教育工学協会理事。著書に『情報社会を支える教師になるための教育の方法と技術』（共著、三省堂）、『GIGA スクールはじめて日記4』（共著、さくら社）など。

◎事例執筆者（五十音順）

- 飯田麻奈** 栃木県壬生町立壬生東小学校・教諭
- 池田理恵子** 山梨県甲州市立塩山南小学校・研究主任
- 石原浩一** 愛知県春日井市立松原小学校・教務主任
- 伊藤真紀** 長野県上水内郡信濃町立信濃小中学校・研究主任
- 稲木健太郎** 栃木県壬生町立壬生東小学校・教諭
- 遠藤みなみ** 静岡県富士市立岩松中学校・研修主任
- 大城智紀** 沖縄県教育庁県立学校教育課
教育 DX 推進室・主任指導主事
- 小川 晋** 愛知県春日井市立高森台中学校・教頭
- 金久保雅彦** 栃木県壬生町立壬生東小学校・校長
- 杉浦寛史** 静岡県吉田町立住吉小学校・教務主任
- 仲宗根康紘** 沖縄県沖縄市立諸見小学校・研修主任
- 仲渡隆真** 愛知県春日井市立出川小学校・校長
- 仲間悦子** 沖縄県沖縄市立教育研究所・研修係長
- 那須栄樹** 山梨県甲州市教育委員会・指導主事
- 長谷川翔太** 静岡県吉田町立中央小学校・研修主任
- 平井奉子** 静岡県吉田町教育委員会・指導主事
- 水谷年孝** 愛知県春日井市教育委員会教育研究所・
教育 DX 推進専門官
- 三津山一世** 静岡県吉田町立自彊小学校・研修主任
- 望月覚子** 愛知県春日井市教育委員会・指導主事
- 森 弥生** 栃木県壬生町教育委員会・指導主事
- 柳原 学** 静岡県吉田町立住吉小学校・教頭
- 若月陸央** 長野県栄村立栄小学校・教諭

◎コラム執筆者（掲載順）

- 大久保紀一朗** 京都教育大学
教職キャリア高度化センター・講師
- 榊原範久** 上越教育大学大学院・教授
- 堀田雄大** 新潟市立総合教育センター・指導主事
- 泰山 裕** 中京大学教養教育研究院・教授
- 谷内祐樹** 信州大学教職大学院・教授

（2025年1月31日現在）

Chromebook、Gmail、Google Chat、Google Meet、Google カレンダー、Google サイト、Google スプレッドシート、Google スライド、Google ドキュメント、Google ドライブ、Gemini および YouTube は、Google LLC の商標です。
FigJam は、Figma, Inc. の商標です。

GIGA スクールはじめて日記 5

教師の学びも個別最適・協働的に！

2025 年 2 月 8 日 初版発行

監修者 堀田龍也
編著者 佐藤和紀・三井一希・八木澤史子
発行者 横山駿也
発行所 株式会社さくら社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-20 ワカヤギビル 5F
TEL : 03-6272-6715 / FAX : 03-6272-6716
<https://www.sakura-sha.jp> 郵便振替 00170-2-361913

ブックデザイン 佐藤 博

© 堀田龍也・佐藤和紀・三井一希・八木澤史子 2025, Printed in Japan
ISBN978-4-908983-82-5 C0037

*本書の無断複写・複製・転載を禁じます。